踏　み　跡　＜My　Mountains＞

会津	尾瀬(鳩待峠から桧枝岐へ)	No.116

昭和４３年１０月５日
徹夜明け・土曜休みとで偶然できた三連休を使って、どこかいつも行かぬような所へでも行ってみようかと思い、色々練ってみた。「和山から鳥甲山」「野反湖から白砂山」・・・・、結局「尾瀬から桧枝岐へ抜ける旅」ということになった。同行：阿部。

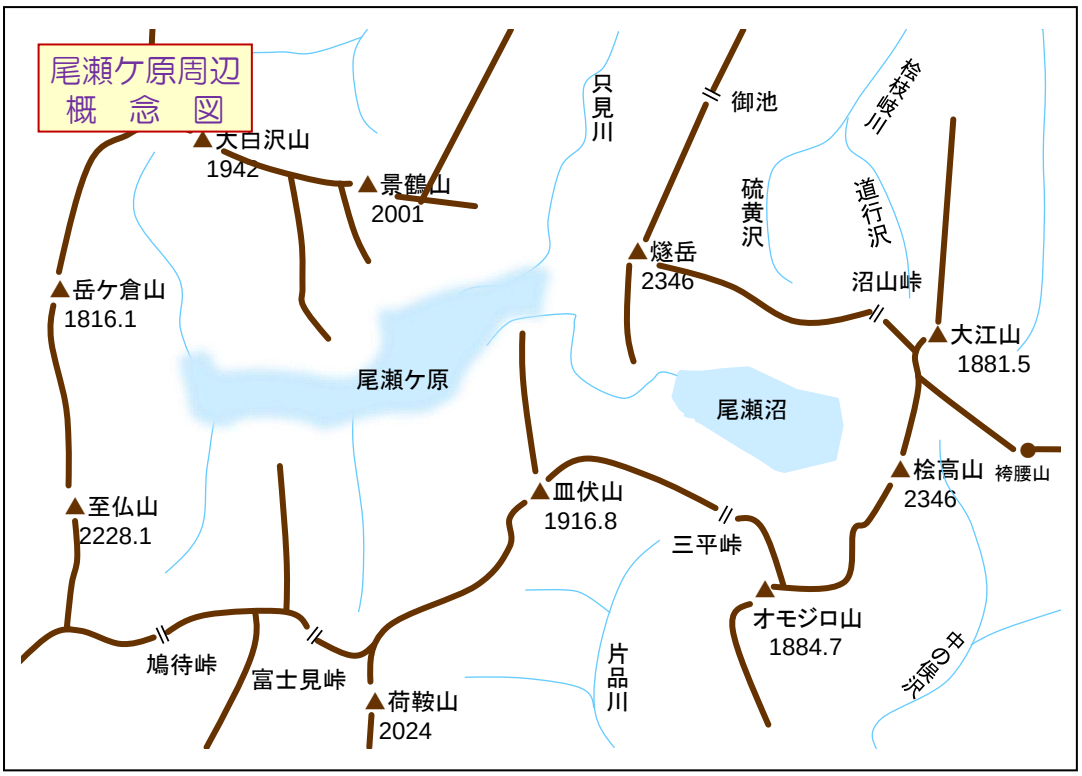
昭和４３年１０月２５日
徹夜勤務明けの朝、上野駅で昨日から預けてある荷物をとって１０時０７分の水上行に乗車。登山靴は履いているが服装はまだサラリーマンスタイルのまま。電車は小雨の中を走り、昼過ぎに沼田に到着。
バスを待つ間に服を着替えて登山家に変身。
バスは戸倉行。戸倉から１０人ほどの女学生の団体に便乗して鳩待峠までジープ。おかげさまで三時間の長途は一時間足らずに短縮できた。
鎌田や戸倉は斑模様の紅葉だったが、峠への道筋はさらに紅さを増し、峠まで来るとその色は緋色とでも言わなければならないような紅さ。どの谷もどの尾根も溢れるほどの秋色に包まれて、この景色が一ケ月後に雪景色と化すとは想像もできない美しさ。そして、一見賑やかで派手でしかも死を覚悟した最後の装いにも似た寂寞感をも感じさせる。木々を割って大きく平らに至仏岳。
鳩待峠から尾瀬ケ原を指しての下りに入ると、紅葉は終わりもう落葉しているものさえ数多く見受けられるようになってくる。材木を敷いた尾瀬独特の遊歩道。雨の止んだ空は晴れ間を見せ、やや薄暗くなり星屑が輝き始める頃に山の鼻小屋に到着。
枯れ葉、枯れ枝、落葉、水の音・・・・、秋から冬への短い間奏曲、伴奏は星空。

昭和４３年１０月２６日
５時４０分起床、昨日の湿った天気とは打って変わって素晴らしい朝。シャーリー・ジョーンズが歌う Oh,what a beautiful morning！（映画「オクラホマ」）を思い出す。
７時１０分出発。至仏を背に燧を前に、黄金色の湿原。尾瀬が原の広さをこの目で確かめながらの歩き。
この二つの山の他に人間の姿は誰も見えない。時々飛び交うヘリコプターのエンジン音だけが唯一の音。
燧が見上げる高さに迫るようになる頃には至仏は低く後ろに去っている。足元の無数の池塘は黄金の山肌を映し、静かに波紋を揺する水鳥の夫婦。

二俣からヨッピ川の流れに沿うようになれば景鶴山が左手に大きく、そして只見川の谷間に会津の大杉岳が姿を現してくる。
一条の煙を上げて建つのは東電小屋。ここの水が只見川となり幾多の発電所の水車を回していくのかと思うと、水の流れにも活気が感じられる。
三条の滝、只見川は源流に近いこんな山奥にもかかわらず水量が多く大河の風情を感じさせる。水量が多いせいか三条の滝の迫力はなかなかのものである。高さは１３０ｍと言われている。滝つぼを見下ろせる位置で昼食。
滝からは只見川を離れて、燧岳をぐるりと回るようについている裏燧林道に入り、御池へ。

踏　み　跡　＜My　Mountains＞

桧枝岐ももう近い。御池から檪平へ下るあたりで後ろから来たトラックが乗せてくれた。助手席には今釣ってきたところだという３０ｃｍほどの岩魚が数匹横たわっている。
桧枝岐１６時４０分。秘境と呼ばれて幾久しいが、今ではもう都会の香りが押し寄せ、また農村も年々変わりゆくゆえ昔ほどの辺地でもないと車の人は言う。しかし、路傍の石仏や古い農家の屋根、老人の顔などにどことなく昔ながらの（と勝手に想像）桧枝岐が覗いている。
旅館ひのえまた　に泊まる。会津の名産である舞茸、岩魚、手打ちそば旨い、桧枝岐へ来た甲斐がある夕食に大満足。

昭和４３年１０月２７日
会津駒に登る予定で５時に起床したが、雨で中止。小降りになってから登山口まで散歩してみただけで、山へは登らず本日の行程は終了。
バスで山を越え谷を渡り三時間を要して会津田島へ。
そして会津線で会津若松へ一時間半。車窓から塔のへつりの紅葉を眺め、たいして疲れもしない最終日。
静寂さの戻った後の、本当の尾瀬の美しさを堪能できたことだけで充分満ち足りた気分になれる今回の山旅であった。山一面朱に緋に黄金に染まる秋の景色は、一見派手な美しさのようではあるがよく見れば、「ひとつの生命の終わりの時」である。植物の臨終の時だと思えば、美しさとともに無常感も感じられる。
雪に埋もれる日も近い秋の尾瀬、初めて尾瀬に入ってみたが、やはり素晴らしいところだった。

以上